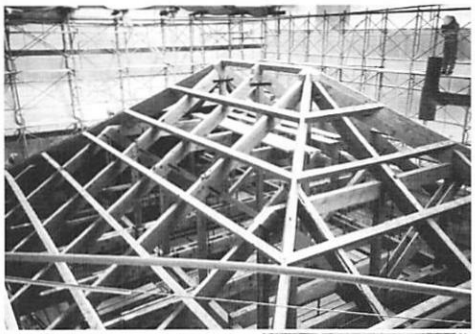
市立函館博物館館報サラニップ

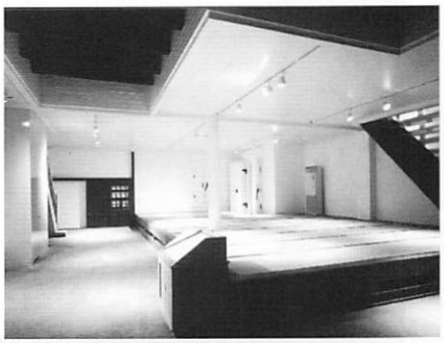
SARANIP

No.40 2001.3.31

よみがえった CANEMORI MISE 旧金森洋物店



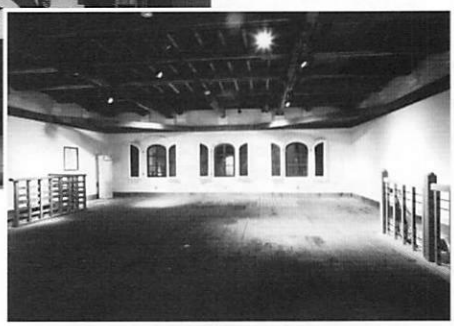
合掌材による小屋組



1階展示室

旧金森洋物店（外観）

煉瓦壁の内部復元状況



2階展示室

市立函館博物館郷土資料館は昭和44年の開館以来、函館ゆかりの民俗、歴史資料や旧金森洋物店関係資料などを展示紹介してまいりました。建物の老朽化に伴い、平成10年から12年にかけて、長年の懸案であった建物の復元改修と展示工事が行われ、10月1日装いも新たに、市立函館博物館郷土資料館（旧金森洋物店）がリニューアル・オープンしました。

およそ120年ぶりに蘇った煉瓦造り洋風不燃質店舗「旧金森洋物店」は、「明治函館のハイカラ商い風景」をコンセプトに当時の錦絵や写真などをもとに復元され、二階建ての白い漆喰壁の建物外観の中で開店当時の看板や外灯、貯水樽がひときわ目を引きます。玄関を入ると、初代店主渡邉熊四郎が欧米漫遊の際購入したオルゴールの音色が店内に流れる中、20畳ほどの帳場と商品棚が設けられ、ビール、缶詰、コーヒーレプリカ、宣伝広告チラシ、家具、調度品とともに舶来洋物、雑貨、食料品を販売していた明治13年当時のCANEMORI MISEが再現されています。二階では、明治の函館の賑わいを再現した風俗人形のジオラマ展示や初代渡邉熊四郎ゆかりの資料、明治のハイカラな函館文化と街並みなどを展示紹介するとともに、建物構造体展示およびビデオ紹介なども行っています。

百聞は、一見にしかず。ここに蘇った「旧金森洋物店」は、古き佳き時代「明治の函館」を彷彿とさせ、古くて新しい顔として次世代に引き継がれます。

長谷部　一弘

平成12年度特別企画展報告

保科　智治

地図が変わるとき北海道の歴史が変わる

古地図にみる北海道

今回の展覧会は、蝦夷地を描いた地図（蝦夷図）の変遷をとおして蝦夷地・北海道の歴史を探るという趣旨のもとに開催しました。対象とした時期は、正保年間から明治８年の近代測量以前までとし、描かれる内容から初期（正保～天明年間）・中期（天明～弘化年間）・後期（弘化年間～明治初期）の３区分を設定し、各期の特徴がわかりやすいように展示しました。初期蝦夷図の特徴は、現在では想像もつかないような形に描かれる蝦夷地とその周辺に描かれる架空の島々です。中期の蝦夷図は天明５・６年に幕府によって行われた蝦夷地調査の結果によって作製された蝦夷図からとなります。この調査によって蝦夷地はほぼ現在の形と似たものになり、初期図ではひとかたまりとして描かれていた千島列島が列に描かれました。後期図の特徴は、輪郭がほぼ整った蝦夷図に内部の調査が加わり、より詳細な蝦夷図が作製され、樺太・千島列島もより詳細に描かれるようになったことです。また、この時期の特徴として蝦夷地が「開港」によって注目され、日本地図にほとんど描かれることのなかった蝦夷地が描かれ出したことです。

蝦夷図のほかに、地理状況やアイヌの生活状況を描いた絵画資料も展示しました。なかでも上磯から根室までの海岸線を８隻の屏風に描いた「東蝦夷地屏風」は興味深いものでした。

展覧会開催にあたって古地図研究家の髙木崇世芝氏には、所蔵する資料を出品していただくとともに、展示解説も行っていただきました。また、(株)五稜郭タワーのご協力により、展覧会の内容をまとめた『北海道の古地図』（髙木氏著）も刊行されています。

平成12年度特別展報告

佐藤　智雄

北のそなえと洋式城郭

五稜郭

今回の特別展は、五稜郭分館を会場に、平成12年６月１日(木)から９月17日(日)までの94日間、近世後期から幕末にかけて構築された台場という遺構に注目し、函館や南北海道に残る城館遺構を中心に五稜郭の築造された時代背景と北辺のそなえとまもりの様子を紹介し、期間中28,568名の入館者がありました。

南北海道には幕末の箱館のシンボルともいえる五稜郭、弁天岬台場をはじめとして、現在53ヵ所の台場といわれる遺構が確認されています。この台場とは、軍艦や海軍力を持たなかった徳川幕府と諸藩が、沿岸に来航する外国船を打ち払うための手段として、岬の先端や沿岸の陣屋に大砲を設置した場所や施設（陣地）を指します。

江戸時代後期から幕末にかけて、日本の沿岸には数多くの外国船が来航し、鎖国体制を守るために、徳川幕府と諸藩によって日本の沿岸には1,000を越える台場が設置されたといわれています。

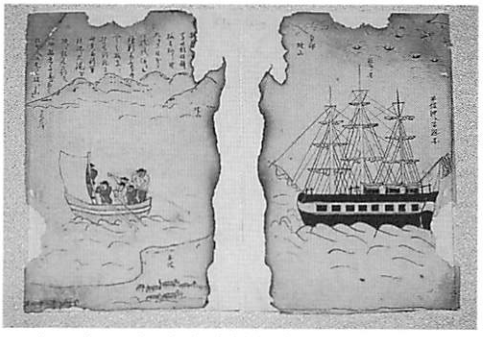
次々と来航する外国船、貧弱な火器、独立国としての体面、開港、明治維新へとめまぐるしい変化をとげた時代は、単に政権が交代しただけに止まらず、日本の経験しなかった産業革命を駆け足でたどっていく、新しい考え方と技術の時代であり、また箱館が脚光を浴びた時代でもありました。異国の船という小さな存在との接触が、日本という国を形作ってゆくきっかけとなり、五稜郭が箱館に誕生することとなるのです。

幕末、英知を集めて築造された台場の集大成ともいえる五稜郭は身近にあります。今一度脚をのばし、土塁の上から湊を行き交う船を眺め、往時の箱館や日本のたどった姿を思い描いてみてはいかがでしょうか。

畳6畳大の地図を見る観覧者

髙木氏の説明を受けて観覧する様子

品川台場(第六台場)全景

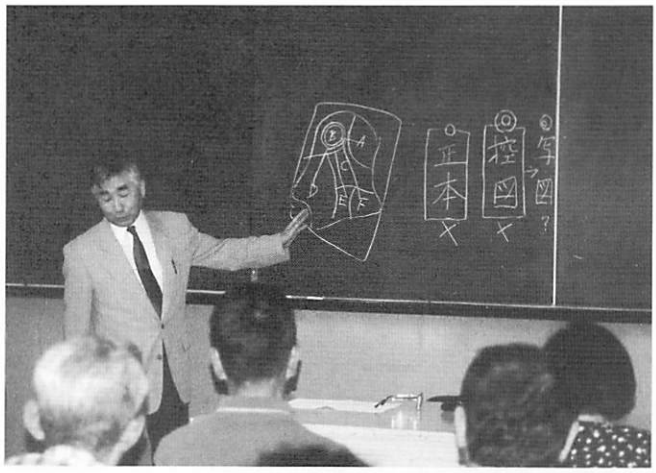

弘化四年丁未陸奥湾捕鯨船(桑村きよ氏蔵)

髙木崇世芝氏に聞く
古地図の魅力

蝦夷図または北方図ともいわれる江戸期から明治初期にかけて作製された北海道の古地図は、全国各地に数多く現在します。その魅力は何といっても、第一は、一枚一枚が異なった図形をもつ面白さだと思います。私たちが知る現在の北海道の形とは全く異なる図形のものがたくさんあります。一例を挙げますと、松前藩が作製して幕府に納めた古い蝦夷図は、蝦夷地は楕円形、千島列島は米粒をばらまいた形、そしてカラフト島は長方形に描かれています。その他民間で作製されたと思われる図には、蝦夷地を曲がりくねった半島状に表現したもの、南北に細長い島としたもの、多くの島々の集まりのように描いたものなど奇抜な図が種々あります。国内の地域図で、これほど多種多様の図形をもつ図は蝦夷図だけです。また古い図ほど、実在の島々に混じって架空の島がいくつも見えます。小人島、女島、裸島、大黒島、磁石島などが描かれていますが、これらは古い時代のお伽話や伝説からきているようです。

第二は、地名や書き入れ文の面白さです。図形は奇抜であっても、その図に記されている地名もその記載順も実に正確なのです。千島列島やカラフト島の地名は奥地に行くほどあいまいなものがあるのですが、蝦夷地には疑問のある地名はごく僅かなのです。そして、地名の説明文がとても興味を引きます。例えば、「この浜に昆布あり、この奥に金山あり、材木多くとれる、大川で鯨が泳ぎ入る、島まで五里で渡る」などと当時の様子を垣間見ることができます。

そして第三は、その歴史性です。どんな地図にも、いつ頃できたものか、どんな人が作製または写したのか、どんな目的で作ったのか、というようなことが思い浮かび、遠い時代の北海道のありようを、図を見ながらあれこれ想像できることも古地図の大きな魅力です。



展示解説セミナーで古地図について語る髙木崇世芝氏

大島ってどこだか知ってるかい？北海道にもあるんだよ

松前大島調査あれこれ

バンダー　佐藤　理夫

渡島大島での調査を始めてから今年で10年になります。過去の調査は、1990年、1991年、1992年、1993年、1994年、1995年、1997年に行っています。

調査方法として渡り鳥の調査（鳥類標識調査:1995年以前の調査や調査方法についてはサラニップNo.35を参照してください）を取り入れたのは1992年以降からで、延べ日数でいえば、前回までに春、夏、秋を合わせ９回57日間となりました。春だけでは４回31日間となり、この間77種1,254羽を標識放鳥しました。特に、1995年以降は春のうち５月の渡りの実態を探る目的で行ってきました。この中には、日本初のコウライヒクイナ（2000年度版日本産鳥類目録にコウライクイナとして初記載されています）など、どちらかといえば大陸系にかたよった鳥類を数多く記録してきました。

今年は4月30日から５月７日の８日間の日程で行いました。今までで最も早い調査時期でした。今回の調査では50種1,117種と過去最高を記録しました。その内訳として記録の多い順からアオジ（156羽）、シジュウカラ（137羽）、ヒガラ（135羽）、メジロ（129羽）、ルリビタキ（88羽）、クロジ（71羽）、オオルリ（49羽）、ウグイス（42羽）、シロハラ（38羽）、ベニマシコ（31羽）、クロツグミ（25羽）、コマドリ（20羽）、ウソ（15羽）と続きます。他に、ヤマガラ、アカゲラが記録されました。これらの鳥のほとんどが、これまでで最多となっており、このことから、渡鳥大島を渡る鳥の多くが５月上旬かそれ以前に最も集中して渡来することが分かってきました。

ノブドウのツルに止まっているウソの雄

資料紹介

平成12年度新収蔵資料展から

絵画専門学校の賞状授与証

平成11年度の新収蔵資料は農機具や寿司道具、レコードなどがまとまって寄贈され、2,052件5,054点と膨大な数になりました。これらの一部を9月12日（火）から10月1日（日）まで、市民にお披露目しました。

今回はその中から、「賞状授与証」を紹介します。

この授与証は、絵画専門学校の生徒である平澤トシ子（号花洞、後に華洞）が明治27年の絵画展覧会において２等賞を受賞した際のものです。審査は絵画専門学校の校主、北条盛英（号玉洞）が行っています。

北條玉洞は嘉永５年に盛岡に生まれ、地元の画家に絵を学んだ後上京し、川端玉章に師事した日本画家です。明治11年に開拓使雇となり、明治15年には函館県地理課雇として地図製作の仕事をしていたようです。

玉洞は明治25年11月、函館に北海道で初めての本格的な美術教育機関である「絵画専門学校」を創立します。絵画専門学校では当初３年間の修業期間を定めていたようです。その詳しい活動内容はわかっていませんが、この授与証とあわせて寄贈された明治26年頃の３枚の下絵から、絵画専門学校の様子をうかがいしることができます。下絵には「八十点精ハ欠ノ樹一等ノ位地ニアリ」「□点よろしく」などの朱書きがあり、教授陣のきめ細やかな指導が感じ取れます。さらに、絵画展覧会を定期的に開催し、作品に優劣をつけ、副賞として画譜などを与え、それらを励みにして生徒の能力を伸ばそうとしていたことがわかります。

北海道における明治期の美術教育を物語る、貴重な資料ということが言えるのではないでしょうか。

霜村　紀子

平成12年度博物館講座報告

植物画を描く

人気講座の講師川嶋昭二先生にお話をお聞きしました。

オオバナノエンレイソウ（川嶋昭二画）

市立函館博物館では平成９年度から毎年植物画講座を行っています。平成12年度は函館市青少年研修センター（ふるる函館）との共催で８月下旬から９月上旬にかけて３回の講座を行いました。

函館では植物画に対する理解はまだ低いのですが、毎年定員を超える申し込みがあり、しかもほとんどが新人であることから、この講座が市民の中に植物画を広げるのに役立っていると感じます。実際に、講座を受講した後も熱心に技法を学び続け、札幌のような先進地の展覧会に出品してもひけを取らない立派な植物画を描くようになった人がいます。また、今年の受講生の中からは植物画を楽しみながら学ぼうという自主的なグループが生れています。

講座は３回だけの短期ですが、用意した教材を使って一枚の葉、一輪の花の描き方からはじめ、透明水彩絵具で必要な色を作り、塗る基本を学び、最後には全員で季節の花、コスモスを精密に描いて終ります。これらの力作は参加者の成果として博物館とふるる函館で各１ヶ月ほど展示されます。この講座では植物画のほんの入り口を学ぶだけですが、受講生の皆さんは熱心に絵筆を握って、個性的な植物画に仕上げています。

植物画は草花や木の姿を細部まで精密に、しかも絵画として感動を与えるように描く芸術です。そのためには絵筆を握ることが好きなだけではなく、植物の仕組みを知る努力とその生き方を理解する優しさが必要です。植物画の愛好家に自然観察好きの人が多いのは当然といえましょう。（植物画講座講師　川嶋昭二）

平成12年度博物館講座開催表

単　講　座

No.	講　座　名	開催期日	参加者数
1	探検!!もっと知ろうよ函館山	５月21日（日）	30
2	春の星座観測（共催）	５月26日（金）	17
3	道南檜山歴史・考古の旅	６月16日（日）	46
4	七夕の星を見てみよう（共催）	７月１日（土）	11
5	展示解説セミナー「古地図にみる北海道」（2回）	７月20日（木）・８月20日（日）	35
6	夏休み自由研究「色を作って絵を描こう」	７月23日（日）	16
7	親子で行く自然体験キャンプ（１泊２日）	７月26日（水）・27日（木）	23
8	五稜郭公園のいきもの地図を作ろう（2回連続）	７月29日（土）・30日（日）	0
9	展示解説セミナー「五稜郭展」（2回）	７月29日（土）・８月５日（土）	15
10	体験学習 土器を作ってみよう（2回連続講座）	７月30日（日）・８月13日（日）	37
11	夏休み自由研究「鉄道車両の仕組みとJR見学会」	８月１日（水）	38
12	夏休み自由研究「科学おもしろ講座－もしも原子がみえたなら」	８月２日（木）	3
13	夏休み自由研究「五稜郭探検隊」	８月10日（木）	10
14	植物画を描く（3回連続講座）	８月26日（土）・27日（日）・９月9日（土）	16
15	秋の星座と中秋の名月観望会（共催）	９月８日（金）	24
16	クリスマスカードをつくろう	12月９日（土）	9

体験する土２・４講座（第２・第４土曜日開催）

No.	講　座　名	開催期日
1	昔の函館を見よう－語る大正・昭和の絵はがきたち－	５月13日（第２土）
2	砂浜の漂着物を拾ってみよう	６月10日（第２土）
3	ほのぼの「手作りおもちゃ」を作ろう	７月22日（第４土）
4	科学ミニ講座－パズルで遊ぼう－	８月12日（第２土）
5	縄文から北洋漁業まで－人と海とのかかわり－	８月12日（第２土）
6	博物館資料に触れてみよう－大砲の弾は重いかな？－	９月９日（第２土）
7	おもしろ縄文体験－土器の文様を作ってみよう－	10月28日（第４土）
8	博物館はどんなとこ－ふだん見られない収蔵庫公開－	11月11日（第２土）
9	科学ミニ講座－ドライアイスで遊ぼう－	１月13日（第２土）
10	生き物の冬越しを観察してみよう	２月10日（第２土）
11	博物館ミニひなまつり－館蔵ひな人形を見よう－	２月24日（第４土）

ワークショップ（通年講座）

No.	講　座　名	開催期日	参加者数
1	四季の星空観測講座	12年５月25日（金）～13年１月26日（金）	23
2	自然観察入門講座	12年４月23日（日）～13年３月11日（日）	51

職員の異動紹介

今年度は博物館長はじめ大きな異動がありました。
新任職員の方々をご紹介します。

博物館長　澤口　喜一（前水道局営業部料金課長）
本館管理係長　吉野　勝範（前納税課整理第２部門主査）
本館管理係　市村　栄子（前水道局営業部料金課収納係）
五稜郭分館　渡辺　敏子（前亀田支所）
本館嘱託職員　山本　泰子（新規採用）

前任の方々には大変お世話になりました。
この場をお借りしてお礼申し上げます。

菅原　繁昭　博物館長→文化財課長
寺本　忠　本館管理係長→中央福祉事務所老人福祉課
佐々木芳子　本館管理係→退職
格口　由美　五稜郭分館→亀田支所
平塚　重之　本館嘱託期間満了

常設展示あれこれ

今年度から、ロビーを会場にした「四季のロビー展」が始まりました。

また、美術や自然の常設展示室も従来とは一味違ったテーマ展示になっています。その内容を一年間ふりかえって紹介します。

四季のロビー展
・春だ！耕せ！
　—亀田で使われた農機具たち—
・ある夏の一コマ
　—いさり火・港まつり・かき氷—
・秋の夜長は音楽で—ＣＤ／ＭＤなんのその
　俺たちアナログＳＰだい—
・冬、雪を楽しむ—げろり・竹すべり・そり

美術常設展示
・蠣崎波響とその周辺
・明治ものがたり

自然常設展示
・道南鳥百科　とり—色とりどり
・明治期の科学者と生き物

ホームページ開設のお知らせ

当館では12月に待望の公式ホームページ（以下ＨＰ）が開設されました。当初は、遅くても10月頃には開設できる予定でしたが、準備不足から遅れに遅れ、12月にずれ込んでしまいました。既に情報を入手した方々にはご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。

画面の素材は一部市立函館図書館からお借りした資料を使用していますが、博物館の収蔵品を主体に構成しています。画面構成は博物館側で集めた素材を基に、業者にデザイン化してもらいました。個人的には落ち着いたデザインになっていると思います。所々問題点は見受けられますが、これらについては修正中のものと、これから修正してゆく予定のものがありますのでご容赦ください。

今後は新たな情報発信も随時していきたいと思います。後先になりましたが、博物館ＨＰのＵＲＬ—インターネット上にある名前のことをこう呼びます—は下記に記載してますので、一度ご覧いただき、ご質問ご意見ご要望などがありましたらお聞かせください。

（佐藤　理夫）

市立函館博物館ホームページ

http://www.museum.hakodate.hokkaido.jp

平成12年度新収蔵資料紹介

○寄贈資料
・地図（函館市街図・函館大火説明図）　1件1点
　［函館市・黒沢　宣哉氏寄贈］
・スキー板　他　18件18点
　［函館市・肥留間　文雄氏寄贈］
・第１回函館港まつり撮影16㎜フィルム　1件1点
　［江別市・馬嶋　元子氏寄贈］
・木製冷蔵庫　1件1点
　［函館市・三浦　政利氏寄贈］
・軍事郵便　他　6件16点
　［函館市・今井　文子氏寄贈］
・北千島植物集　他　63件203点
　［函館市・松本　勝美氏寄贈］

○登録資料
・書簡　他　6件16点
・絵はがき　他　7件7点

○購入資料
・蝦夷太平記挿絵（梁川剛一画）　1件1点
・通行手形　1件1点
・函館市観光ポスター「はこだて」　1件1点

ここに掲載している新収蔵資料は、平成12年４月１日から平成13年１月31日までに受け入れたものです。

－誌名ＳＡＲＡＮＩＰ(サラニップ)について－
アイヌ語：シナの樹皮で編んだ袋。
博物館情報や研究成果などをＳＡＲＡＮＩＰに入れておき、その蓄積が今後重要な資料となっていくようにと命名したものです。

ＳＡＲＡＮＩＰ－サラニップ－No.40　2001.3.31発行
編集・発行　市立函館博物館
〒040-0044
函館市青柳町17－１(函館公園内)
Tel.0138-23-5480 Fax.0138-23-0831